人権コラム５月号

漫画が戦争のリアルを描く「戦争は女の顔をしていない」

大阪教育大学　神村　香織

今、私が原稿を書いているのは3月末である。日本では桜の開花がはじまり、いよいよ穏やかな春の季節がやってきた。生命の芽吹きを感じる季節だ。しかし、日々流れてくるウクライナをめぐる情勢は厳しく、「戦争の世紀」といわれた20世紀の再燃を思わせる状況にある。このコラムが皆さんのところに届く頃、ウクライナの人々が希望と未来を語ることができることを祈りながら筆を進めたい。

2020年は日本にとって戦後75年の節目の年であった。第二次世界大戦を経験した方々が亡くなられていく中で、「戦争を知らない世代がどう戦争に向き合うか」「戦争のリアルをどのように伝えていくのか」ということが重要な課題となっていた。そんな時にある異色の漫画がヒットしていることを知った。その漫画のタイトルは「戦争は女の顔をしていない」（KADOKAWA 2020）。原作は、ベラルーシのジャーナリストであったスヴェトラーナ・アレクシエーヴィチさんが2015年にノーベル文学賞を受賞した代表作だ。原作は1984年に発表されているが、祖国ベラルーシは独裁政権下にあり長く出版禁止になっているという。

漫画はネット上ならごく一部を無料で読むことができる。原作の日本語訳ならば、Amazon プライムで無料で読めることを知り、さっそく入手した。それは、500人を超える従軍女性一人ひとりにインタビューを敢行し聞き取った証言集であった。圧巻である。彼女たちは、看護兵、工兵、狙撃兵、洗濯兵、軍医、飛行士など、戦線のさまざまな部隊に配属されていたが、それは勇ましい戦記でもなければ、悲しい物語でもない。インタビューで聞き取られたのは彼女たちが過ごした生活の事実だ。たとえば、生理用品が支給されないため、行軍中に流れた血がズボンを濡らし、それが乾くと鋭利なガラスのようになったという記憶。たとえば、男物の下着しか配給されずそれが一番悔しかったという記憶。たとえば、看護兵として切断された手足を両手で抱えて次々に桶に入れていった記憶。戦争が終わると勲章も役に立たず、従軍していたことが分かると結婚もできなかったという記憶。あの地獄を体験し直したくないと語りを固辞する女性もいれば、「わたしたちの歴史を書くには、わたしたちの数えきれない涙の粒を書き留めるにはあなたのような人が何百人も必要だ」と戦友を紹介してくれる女性たちも数多くいたという。500人が語るひとりひとりの記憶の断片は、ゆるぎない真実で、どのようなメッセージよりも強く存在し続ける。「戦争反対」と書かれているわけではない。しかし、全編を読むことによって、もうこんなことを経験したくないと思う確かな記憶が心の奥に刻まれる。

この戦争の舞台は、第二次世界大戦中のナチスヒットラー率いるドイツとスターリン率いるソヴィエト連邦の戦いだ。しかし、読み始めると気づく。血と泥にまみれた彼女たちの主な戦場は、両国の間に位置するウクライナでありベラルーシだったのだ。同じ過ちを繰り返さないためにも、彼女たちの声を受け取り、つなげたいと思う。